

日蓮宗 金剛 盤

COMPASS

http://www.hodoin.net

発行所: 東京都豊島区南池袋
一丁目十三番十六号
日蓮正宗法道院法華講
03 (3984) 2650

誤った本尊は人を不幸に

世の中には数多くの宗教がありますが、その中でも、南無妙法蓮華經と唱えることを宗旨とする教団は数十にのぼるといわれています。どの教団も南無妙法蓮華經というお題目が有り難いということ看板にしている点では変わりはありませんが、その実状を見てみると、拝む対象である本尊が違っていたり、教義がまちまちであったりしており、唱える南無妙法蓮華經以外は、まったく異質の教団を形成しています。

南無妙法蓮華經は、日蓮大聖人が唱え出された尊極の法ですが、その意味、内容について、日蓮大聖人の教えのままに受け継いでいる教団は、ほとんど見受けられません。

さらに、日蓮大聖人が南無妙法蓮華經と唱え出されてから、七十五年になります。いわゆる立正佼成会や霊友会、創価学会などの新興宗教は論外としても、いわゆる日蓮門下といわれるものが多数存在し、門外漢には、その違いもわかりにくく、まして、どの門下が日蓮大聖人の教えを正しく受け継いでいるのかを判断することは困難を極めます。このことをきちんと解決するために、まず、宗教とは何かという原点に立ち返って考えてみることにしましょう。

世の中には、たくさん宗教・宗派がありますが、その各宗教・宗派には、それぞれの教えや指針などを信仰の対象として具体的な形に表した「本尊」があります。本尊とは、根本として尊敬(そんぎょう)するべきものという意味で、信仰・礼拝する対象のことです。

どうして本尊が信仰の対象となるかといえば、それは本尊を信仰することによって、自己と本尊との間に感応道交(かんのうどうこう)という現象が現

れるからです。

感応道交とは自己と本尊を一体化させようとすることにより仏の応現を感じ、仏はよく衆生の機感に応じて互いに通じ合う働きのことです。その本尊を信仰・礼拝すると、その本尊と一体化するほど強い影響を受けるに至るのです。そのため、どのような本尊を信仰・礼拝するかは、その人の幸、不幸を決定するほど大切なこととなります。

ここで、いわゆる日蓮宗(身延山久遠寺を本山とする一派のこと。池上本門寺、中山法華経寺などもこの派に含まれる)の信仰・礼拝するものを見てみましょう。

日蓮宗では、日蓮門下と称しながら、帝釈天や鬼子母神、摩利支天、七面大明神、稲荷などを祀り、参拝者に拝ませています。しかし、帝釈天は仏法守護の諸天善神であり、鬼子母神は法華經の行者の守護を誓った夜叉であり、摩利支天は日光を人格化したもので仏法守護の諸天善神であり、七面大明神は天女(竜女、あるいは菩薩という説もあり)であり、稲荷は人を化(ば)かす畜生の狐に過ぎません。もちろん、これらは信仰の対象でもなければ、礼拝するものでもありません。なぜなら、仏教とは仏の説かれた教えであり、その教えの通りに仏道修行を行い、正しい仏を信仰・礼拝することにより、仏と感応道交し、自らの成仏を期することを目的とするからです。ところが、日蓮宗では、信仰・礼拝するべきではないものを参詣者に拝ませて平然としているのです。

日蓮大聖人は「本尊とは勝れたるを用うべし」と、厳しくこのような本尊の雑乱を破折されています。拝むべきでないものを拝めば、拝んだ人に悪影響があるのは当然のことです。もちろん、これらの行為は、日蓮大聖人の教えに違背した邪義であることはいうまでもありません。

日蓮大聖人の正しい後継者とは

日蓮大聖人は、多くの法難に遭われながらも、法華經の肝心である南無妙法蓮華經を弘められ、弘安二年十月十二日に出世の本懐として「本門戒壇の大御本尊」を御開顯されました。そして、弘安五年、六老僧(六人の高僧)の中で、日興上人を血脈付法の第二祖と定め、大御本尊を始め仏法の一切を付嘱され、十月十三日に六十一歳をもって御入滅されました。

日蓮大聖人のあとを受け継いだ日興上人は、身延に入山されましたが、地頭・波木井実長(はざりさねなが)が謗法行為(ほうぼうこうい)。誹謗正法のこと。正しい教えに背き、信受しないこと)を重ねたため、正応二年の春、本門戒壇の大御本尊を始め、大聖人の御靈骨・御書などの重宝を捧持して門弟とともに身延を離山され、かねてより大聖人が御遺言された富士上野の地に大石寺を創建して御遺命の本門戒壇建立の靈地と定められました。

ここで、日興上人以外の五老僧がどうして、日蓮大聖人の正義(しょうぎ)を信解できず、謗法をおかすようになっていったかを見てみましょう。まず第一に、日蓮大聖人滅後、日興上人は日蓮大聖人の弟子・日興と名乗りましたが、他の五老僧は、日蓮大聖人の弟子と名乗ることにより起こる法難を恐れ、臆病にも天台沙門(天台宗の僧)と名乗りました。日蓮大聖人が末法は一切衆生を救うために正義をうち立てられたにもかかわらず、その弟子であると堂々と名乗られたお方は、日興上人ただおひとりだったのです。

次に、波木井実長の次男である家長が、三島大社へ参詣を企てたとき、日興上人は大聖人の教えの通り、神社参詣は謗法であると厳しく制止されました

日蓮宗とは、どのよりの宗教か

が、波木井実長親子はこれを納得せず、民部日向（みんぶにこう）に同じ質問をなし、あるうことか、民部日向はこれを推奨するという謗法をおかしました。

このように地頭である波木井実長の信心に油断が生じ、謗法敵戒の姿勢にゆるみが出てくると、日蓮大聖人の御入山以来、法華一乗の山であつた身延山にも念仏者たちが姿を見せるようになりました。

第三には、富士信仰（富士山を霊場とする山岳信仰）の行者が塔を建立するのを波木井実長は排除するどころか、むしろ彼らに荷担し、さらに、日蓮大聖人が念仏は無間地獄の業因であると厳しく破折されていたのを知っていたながら、念仏の道場を領内に建立するという謗法も行うようになりました。これも民部日向の認めるところだったのでした。

第四には、波木井実長はこれまでの謗法に何ら恥じることなく、今度は釈迦の立像を造立しようとして企てます。しかし、立像釈迦仏とは、本来、釈尊がまだ悟りを開く以前の修行の姿を現したもので、小乗教の本尊を意味します。もちろん、このような釈迦仏を造立し、信仰・礼拝することは謗法の最たるものです。しかし、民部日向や波木井実長には、そこまでの法義を理解する力もなければ信心もなくなっていたのです。この大謗法の企てに、日興上人は、日蓮大聖人の出世の本懐である十界互具の曼陀羅本尊を御安置するよう勧められましたが、波木井実長は聞く耳を持たず、とうとう立像釈迦仏を造立してしまいました。民部日向に籠絡され、信心を失ってしまった波木井実長は、日興上人の御慈悲ある御指南を正常に拝することができなくなりました。

これらの行為以外にも、数々の謗法をおかすようになつてしまった民部日向と波木井実長は、日蓮大聖人が晩年を過ごされた身延の山を謗法で汚（けが）しきつてしまったのです。

これらの事実を冷静に見つめたとき、現在の日蓮宗が、帝釈天や鬼子母神、摩利支天、七面大明神、稲荷などを祀り参拝者に拝ませている

元凶は、民部日向と波木井実長の謗法にあつたことがよくわかります。

このように、日興上人が身延を離山されて以来、日蓮宗の本山である身延山は、おそまじき謗法の山と化し、日蓮宗とは名ばかりの邪宗教の大本締めとなつてしまったのです。

末法の仏様とは

仏教では末法という言葉がよく使われますが、末法とは、どういう時代を指す言葉なのでしょう。

実は、末法とは釈尊が亡くなられて後、二千年後の時代を意味する言葉なのです。末法の末とは、漢文では否定形として用いられ、末法とは、釈尊の法（白法）がなくなった時代、釈尊の法が効力を失った時代のことを指します。釈尊が入滅した後、二千年後、釈尊が説かれた教えに人々を救う力がなくなり、経巻のみがあるだけで、正しい修行も功德もなくなり、自然災害が多発し、不治の病が流行し、人々の間では争いの絶えない時代が訪れると経巻には説かれています。

しかし、そのことによつて仏教が減じたわけではありません。釈尊は、末法に入つてからの仏法についてもきちんと説かれて生涯を閉じられているのです。

では、末法に入り、釈尊の法が減した後、どのような仏様が現れるのでしょうか。また、それは、一体、どの経典に説かれているのでしょうか。実は、そのことが釈尊の出世の本懐である法華経に説かれているのです。

釈尊は五十年間にわたり法を説いてきましたが、最後の八年間に自分自身がこの世に出現した一番の目的である最も重要な法を説かれました。その法こそが法華経だったのでした。さて、法華経に説かれた末法の仏様についてですが、法華経には、どのように説かれているのでしょうか。

法華経には、その仏様は、末法に現れて法を

説くが、ある時は、しばしば所を追われ、また、ある時は、時の権力者や出家在家の人々に迫害を受け、石を投げられ、杖で打たれ、あまつさえ、刀の難まで受けられながら、一切衆生を成仏に導き、幸せにする法を説いていくと説かれています。その仏様は、末法の衆生の闇を払い、人々がもっている尊い命を輝かせる大白法所持され、その法を説くために、いかなる難も耐え忍ばれるのです。

日蓮大聖人は、末法は一切衆生を救うために、法華経に予証された通り、数多くの法難に遭いながら、唯一無二の法を説かれました。そのお振る舞いは、まさに、法華経に説かれたそのまますま身をもちて行じられ、まさに、末法の仏様であることをその行動によつて証明されたのです。

このことが理解できないため、日蓮宗では、日蓮大聖人を日蓮大菩薩などと呼び、末法では、功德も利益もない釈尊を本尊と立てますが、それは、去年の暦を今年になつてめくつていようなもので、何の役にも立ちません。名は日蓮宗でも、日蓮大聖人が、末法の御本仏であることも知らず、かえつて、日蓮大聖人の仏法を曇らせる、師敵対の宗旨となつてしまったのです。その姿は、本尊の雑乱といい、謗法行為といい、誤りに誤りを重ね続ける墮地獄の因となる邪宗教そのものなのです。

真実の宗教とは

人は、苦しいことや悲しいこと、また困難なことに出会つたとき、それを解決し克服する方法について思いをめぐらします。しかし、その解決方法を見いだすことは容易なことではありません。

仏法では、生・老・病・死など人間だけれどもが直面する人生の本質的な苦悩を根本的に解決する道を説き示しています。そして、その本質的な苦悩を解決せずして、真の幸福はありえないと説いています。

真の幸福とは、観念的なものではなく、因果の道理をもととした正しい信仰によつて、自己の内面にある健全な生命を確立し、深い智慧と強い心を養うことによつてはじめてもたらされるものです。

日蓮大聖人は、末法は一切衆生を真実の幸せに導くため、最高尊極の法である南無妙法蓮華経を唱え出されました。その日蓮大聖人の教えを七五十年間にわたつて現在まで清浄に誤りなく受け継いできた唯一の教団が富士大石寺を総本山とする日蓮正宗なのです。

私たちは日蓮正宗の信徒として、法道院（池袋）で歓喜に満ちて信仰に励んでいます。どうか、みなさんも真実の仏法と出会つて、かけがえない人生を光り輝かせてみてはいかがでしょうか。

